

館蔵資料紹介 No.10

漢方の古書について

藤原久義

岐阜大学附属図書館の館報編集委員会より図書館に秘蔵されていた、漢方に関する漢文で書かれた古書を見せていただく機会があった。それは以下の4つの書物である。

- ・ 傷寒六書
- ・ 難経本義
- ・ 脾胃論
- ・ 靈樞

いずれも江戸期に入って日本で木刻された中国医書の刊本であり、古びた表紙をはじめ、古人が丁寧に丁寧に頁をめくった後などあり、漢方に興味のある私としては感激した次第である。

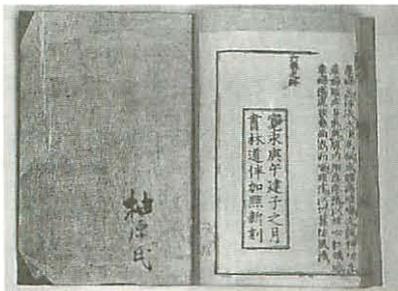
さて、傷寒六書は陶氏傷寒全書ともいい、15世紀中期に中国で陶節庵によって書かれ、6巻からなっている。

巻一の陶氏家秘は傷寒の病証を中心にし、風温、風湿、温度等の病証を述べたもの。巻二の明理統論は「傷寒明理論」を改定したものである。巻三の傷寒瑣言は陶氏の傷寒論に関する考えをまとめたものである。巻四の殺車槌方は、主に投薬についてまとめたものである。

巻五の一提全啓蒙は、「傷寒促網」という書物を解説したものである。

巻六の證脉截江網は、傷寒の病因や投薬を弁じ、男女の違い等を述べたものである。これらの全体が、春・夏・秋・冬の4冊本におさめられていた。

これらは漢方の古典として最も重要で、西暦200年頃漢の時代に中国で書かれた傷寒論の解



説本である。

さて、傷寒論とは東洋医学の古典の第一とされるものである。主に急性疾患、現代医学からみると腸チフスと類似した疾患に対する病状の変化と、それに対する漢方治療の仕方を事細かに具体的に記載したものである。作者は張仲景とされているが、異論もあり確かなことは不明である。西暦200年頃のは原型があったとされるが、この点についても確かなことは不明である。本館所蔵本は、江戸時代初期の京都の書林中野市右衛門道伴によって、寛永7年（1630）に加点新刻されたものであり、貴重な資料といえる。道伴は東福寺の学僧文之の門に学んだことがあり、原典に自点を付して刊行したものと注目される復刻書である。「柚原」との所蔵印ならびに墨書があり、飛騨高山の医師柚原家で用いられていたものと判明し、興味深い。



次に難経本義である。難経本義とは1366年に出された難経の解説書である。著者は元の滑壽。難経についてのこれまでの注解書の正誤を正し、自己の解説を述べたものである。

この難経本義は、上・下の2冊に分かれていた。いたるところに朱で書かれたきれいな書き込みがある。この書き込みも漢文でなされており、昔の日本人は字が上手で



あったと驚かされる。

本書の構成は以下の如くである。

《難経本義卷之上》

序

1 難～22 難 脈学

23 難～29 難 経絡

30 難 臟腑

《難経本義卷之下》

31 難～47 難 臟腑

48 難～61 難 疾病

62 難～68 難 腧穴

69 難～81 難 針法

難経とは、《黄帝八十一難経》ともいう。秦越人によって書かれたとされる。本書は設問方式で編纂されている。本書は《内経》と成りて針灸学の基本となっている書物である。本館所蔵本の巻末には、「山本長兵衛新版」と刻されている。残念ながら刊年は記されていない。『慶長以来書買集覧』によれば、山本長兵衛は寛永年間に開業した京都の代表的な版元である。金屋と号し謡曲本の版元として有名であるが、享保13年(1728)には『医学正伝或問診解』、宝暦11年(1761)には、『傷寒通玄類読』等の医書も出版している。

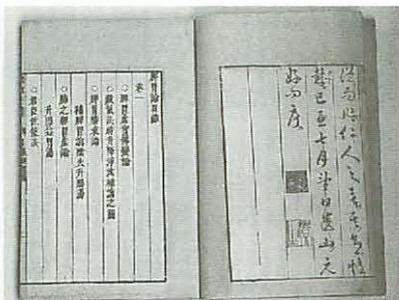
書き込みの分析から、今後、刊年や書誌的特質を考察してみる必要がある。

脾胃論とは、1247年頃中国で作られたものである。

李氏による《内経》の「人は水穀を以て本となす」を根拠とし脾胃を補益する重要性を強調した書物である。

また、飲食などで生ずる脾胃病に対して、補中益気湯などが有効であることを述べている。この書は脾胃論学説の基本的書物で、漢方の重要な古典の一つである。

乾・坤の2冊にわかれていた。乾には序および目録ならびに卷之一・二が書かれ、坤には卷之三・四があった。難経本



義と同様に京都の書肆山本長兵衛が新版で出したものであった。訓点が付されており、医家に重用されたものと思われる。

霊枢とは《霊枢経》《黄帝内経霊枢経》ともいう。《内経》を組織している一部である。原書は9巻81篇であり、また《針経》

《九卷》ともいう。漢方用語大辞典によると、隋唐の時に、多くの異なった名称の伝本が出現したが、《九霊》《九墟》《霊枢》を包括している。宋代以後、原本および伝本は多くばばらになってしまい現在の《霊枢》の伝来は、南宋の史崧の家蔵9

巻にもとづき、重ねて新しく編集し、24巻となった。本書と《素問》の内容はよく似ており、経絡、針灸が詳しく書かれているが、運氣学説は略されてある。基礎理論と臨床方面を紹介し、《素問》の内容を補充し明らかにしている。これは針灸療法の重要文献であり、歴代の医家の重視するところとなっている。

このうち、私が見せてもらったものは、黄帝内経霊枢経卷之五～八である。卷之一～四、卷之九は、残念ながら所蔵されておらず、通例最終巻にある刊記が不明である。

「勝股蔵書」との蔵書印があり、勝股家から昭和31年に寄贈をうけた一書である。朱書きによる訓点の訂正、語句への注書きなど書き込みが多数あり、深く考究された跡がうかがえ興味深い。本書の書誌上の位置づけについてはかなりの傍証資料が必要であり、今後の課題とせざるを得ない。

(ふじわら ひさよし：医学部教授)

(本図書の配置場所：特別資料・フィルム庫)

